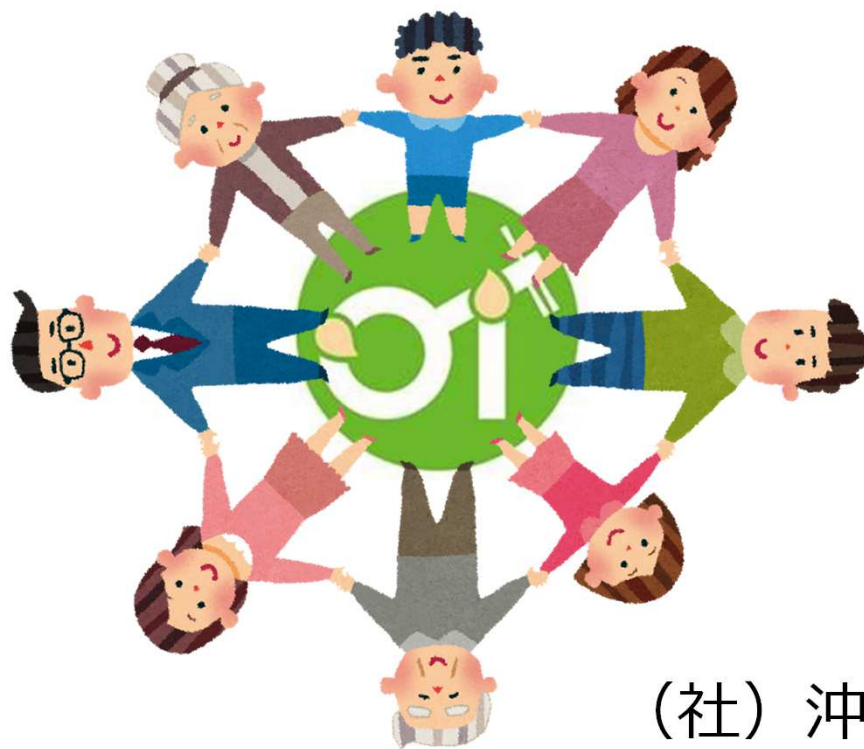


平成25年度 日本作業療法士協会パイロット事業

対象者の生活支援をより具体的なものにするために。

～対象者の生活圏域における

作業療法士同士の意味のある連携を作る～



(社) 沖縄県作業療法士会

●本事業のきっかけ

サマリー等の紙面情報のやり取りでは抜け落ちてしまう「その人らしさ」や「意味ある作業」を伝達するため、直接的な連携（電話する、会うなど）を実践する。

その過程で作業療法士（以下OT）の連携の在り方について考えたい。

●事業の目的

- ①連携状況の把握
- ②OT同士の直接的連携の促しとそのための地域でのネットワーク作り
- ③直接的連携の結果・効果分析（対象者への効果・OTへの効果）
- ④他職種への効果提示：作業療法の啓発・普及

活動内容

- ① 連携に関するアンケートの実施（事業の前後 2 回）
- ② 連携に関する研修会の開催：
県内2箇所。現状の問題を共有
- ③ 近隣のOTが集まって連携についての会議開催：
北部・中部・南部の各エリア
- ③- 2 臨床現場での直接的連携を促すツール
「いちゃりばちょーでえカード」を作成・配布
- ④ 沖縄県作業療法学会での事業報告

2013-2014



3月 エリアリーダー会議⑧

2月 沖縄県作業療法学会にて活動報告

後期アンケート調査実施

1月 エリアリーダー会議⑦

12月 エリアリーダー会議⑥

11月 エリアリーダー会議⑤

10月 エリアリーダー会議④

8月 連携に関する全体研修会（北部会場）

連携に関する全体研修会（中南部会場）

中部エリア会議開催

北部エリア開始開催

7月 エリアリーダー会議③

6月 エリアリーダー会議②

5月 前期アンケート調査実施
南部エリア会議

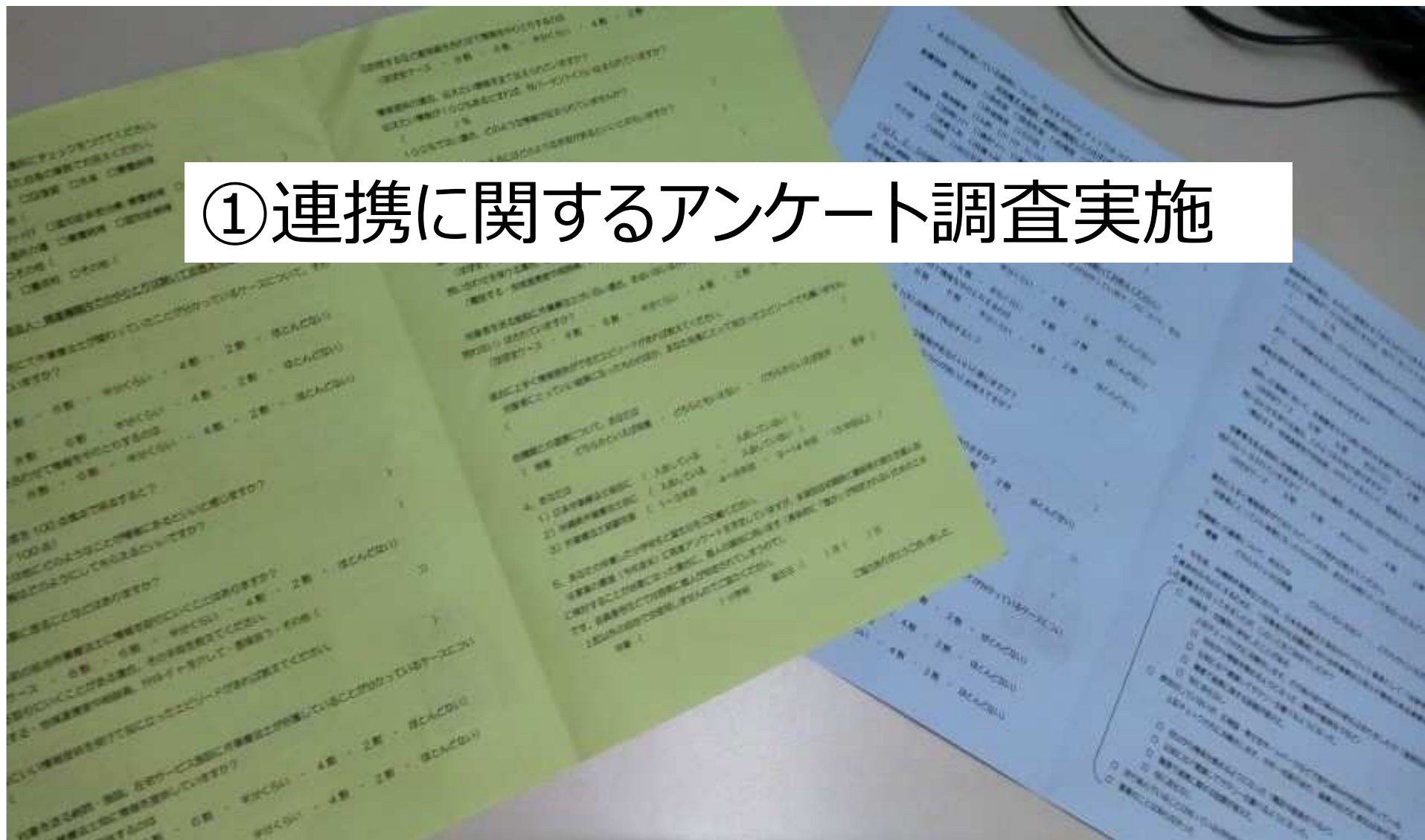
4月 エリアリーダー会議①

3月 連携に関する事業前研修会開催

1月 パイロット事業企画会議



①連携に関するアンケート調査実施

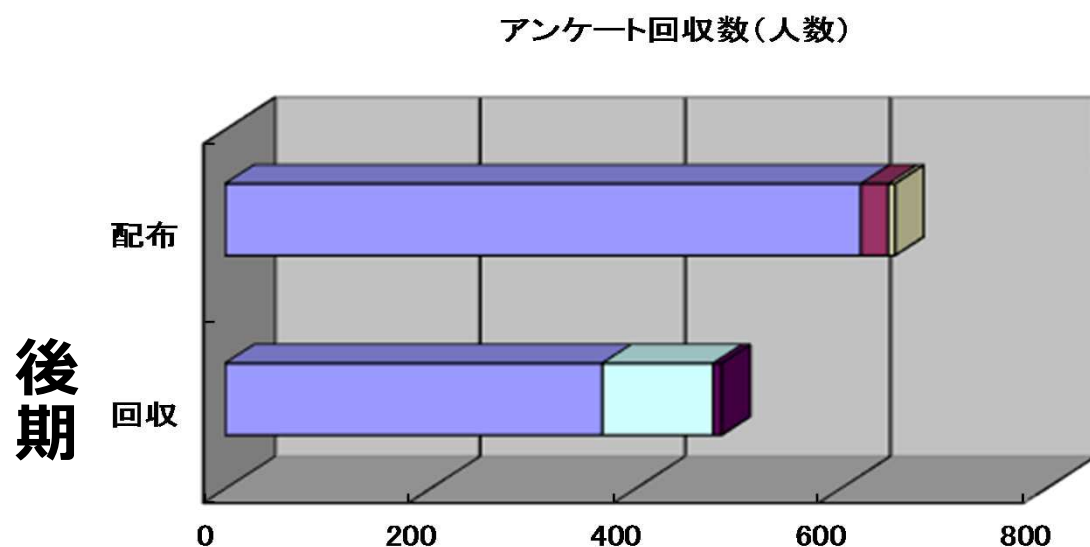
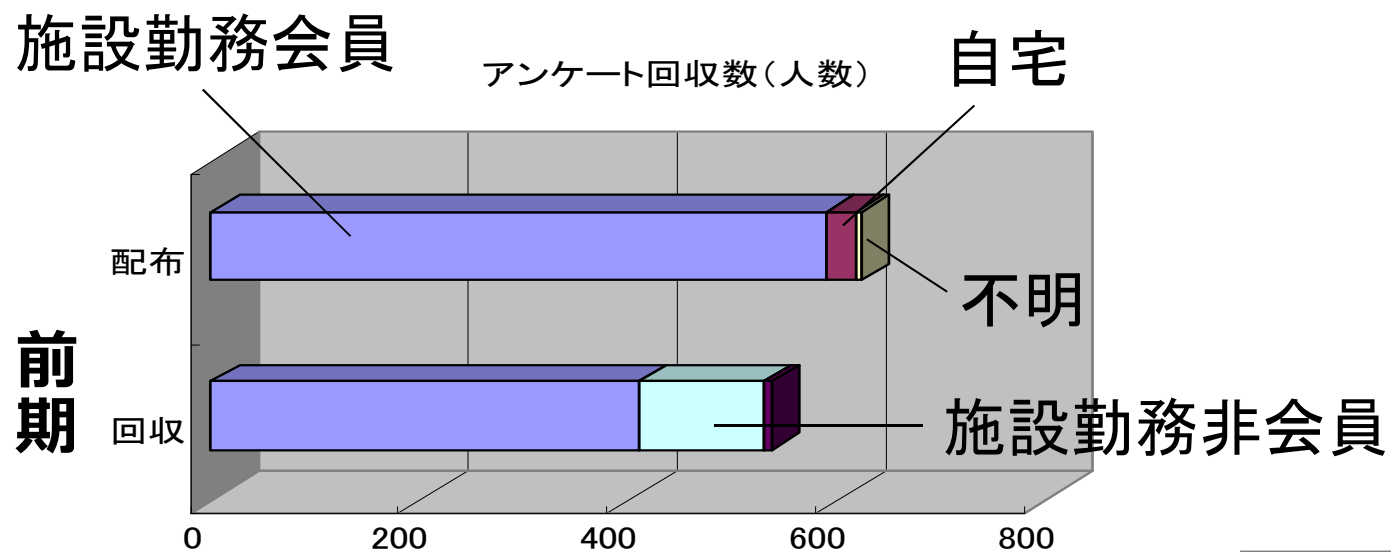


①連携に関するアンケート調査実施

対象：県士会員所属施設の全OTR

回収数と回収率

アンケート実施月	県士会員	非会員	県士会員回収率	施設回収率
平成25年6月（前期アンケート）	410	121	69%	74%
平成26年2月（後期アンケート）	368	108	56%	55%



前期会員回収率

69%

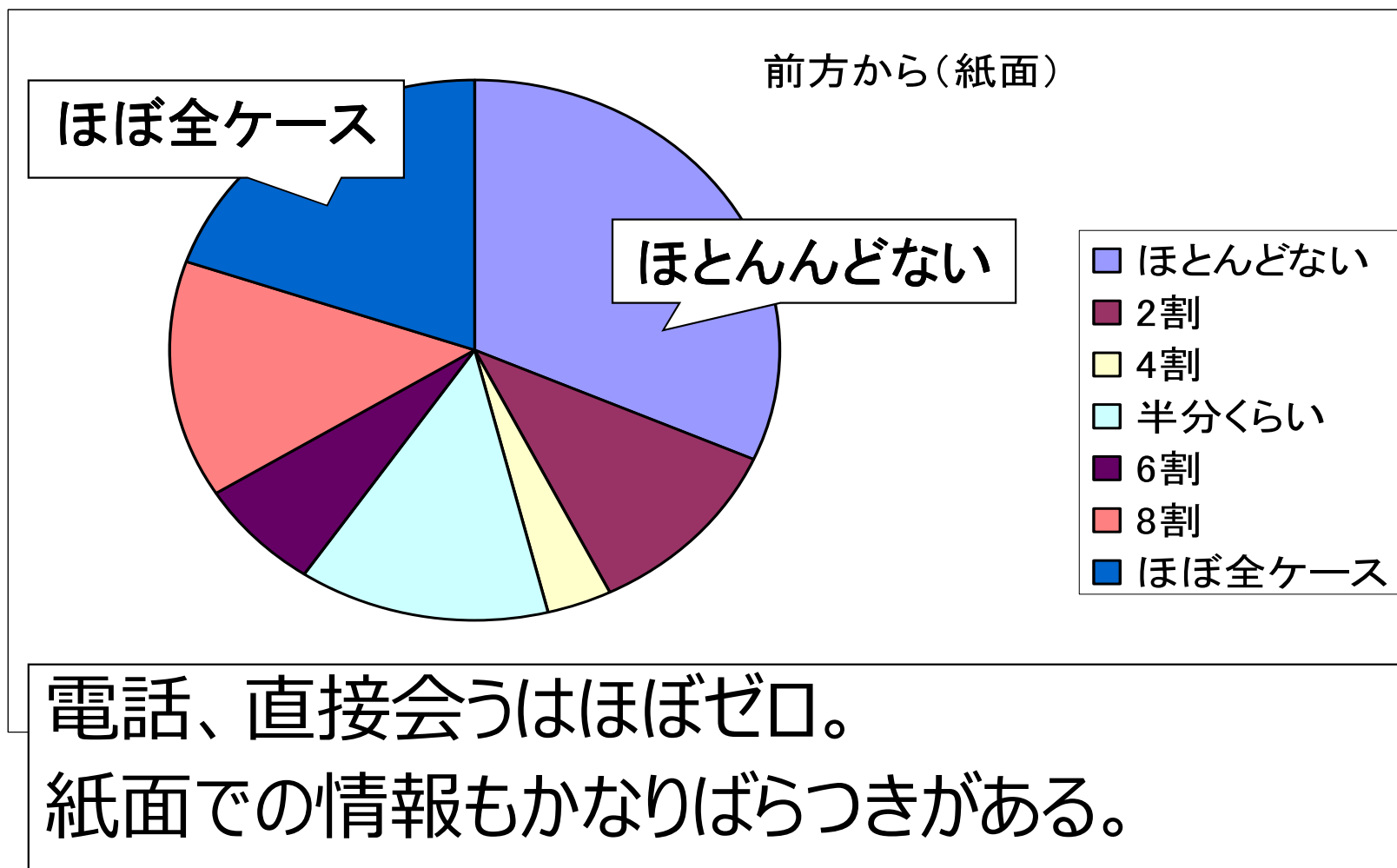
後期会員回収率

56%

非会員からの回答も多数

※県内OTの連携に対する意識の高さがうかがえる。

Q.前の病院・施設、あるいは在宅にてOTが関わっていたことが分かっているケースについて、その担当OTから情報が届いていますか？



アンケート結果より

- ・急性期に情報自体が届いていない
- ・回復期が「送れていない情報」と生活期の「欲しい情報」の内容が重なる
- ・急性期→回復期の情報は比較的確保
- ・情報伝達の手段はほぼ紙面

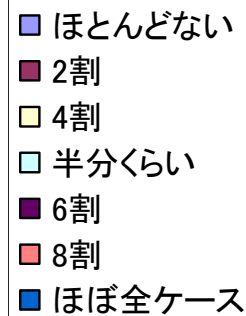
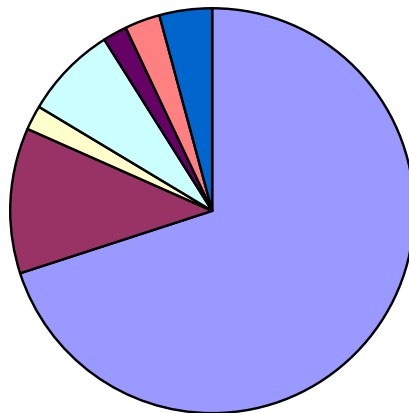
自由記述欄から考えると

- 受け手が欲しい情報は、
送り手も伝えられていないと感じている情報。
- 「情報」は持っているが、それが繋がれていない。
- 現在の方法では、「欲しい情報」と「伝えたい情報」
が繋がれないまま。

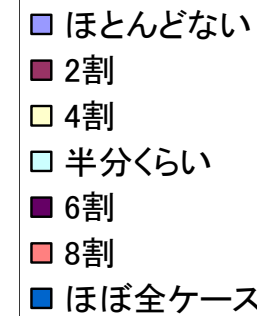
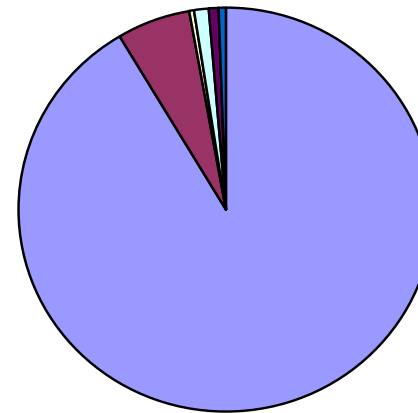
ちなみに

Q.あなたから前の担当OTに情報を取りに行くことはありますか？

情報を取りに行くか？



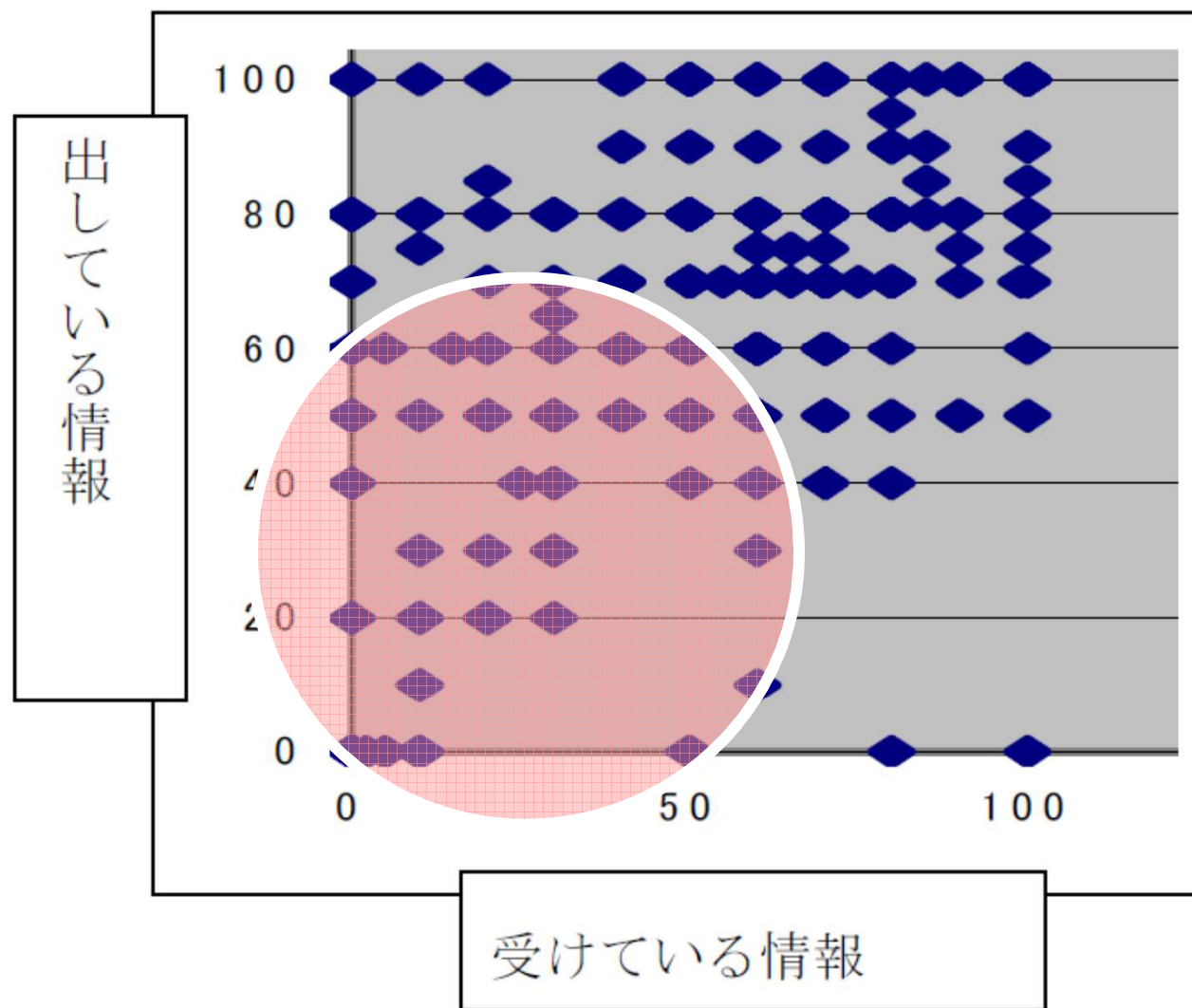
問い合わせを受けるか？



取りに行くことも、

問い合わせを受けることも、ほぼゼロ。

疑問 1 「送られてくる情報が足りない」と思っている人は、
逆に自分は情報を十分に伝えられているのか？

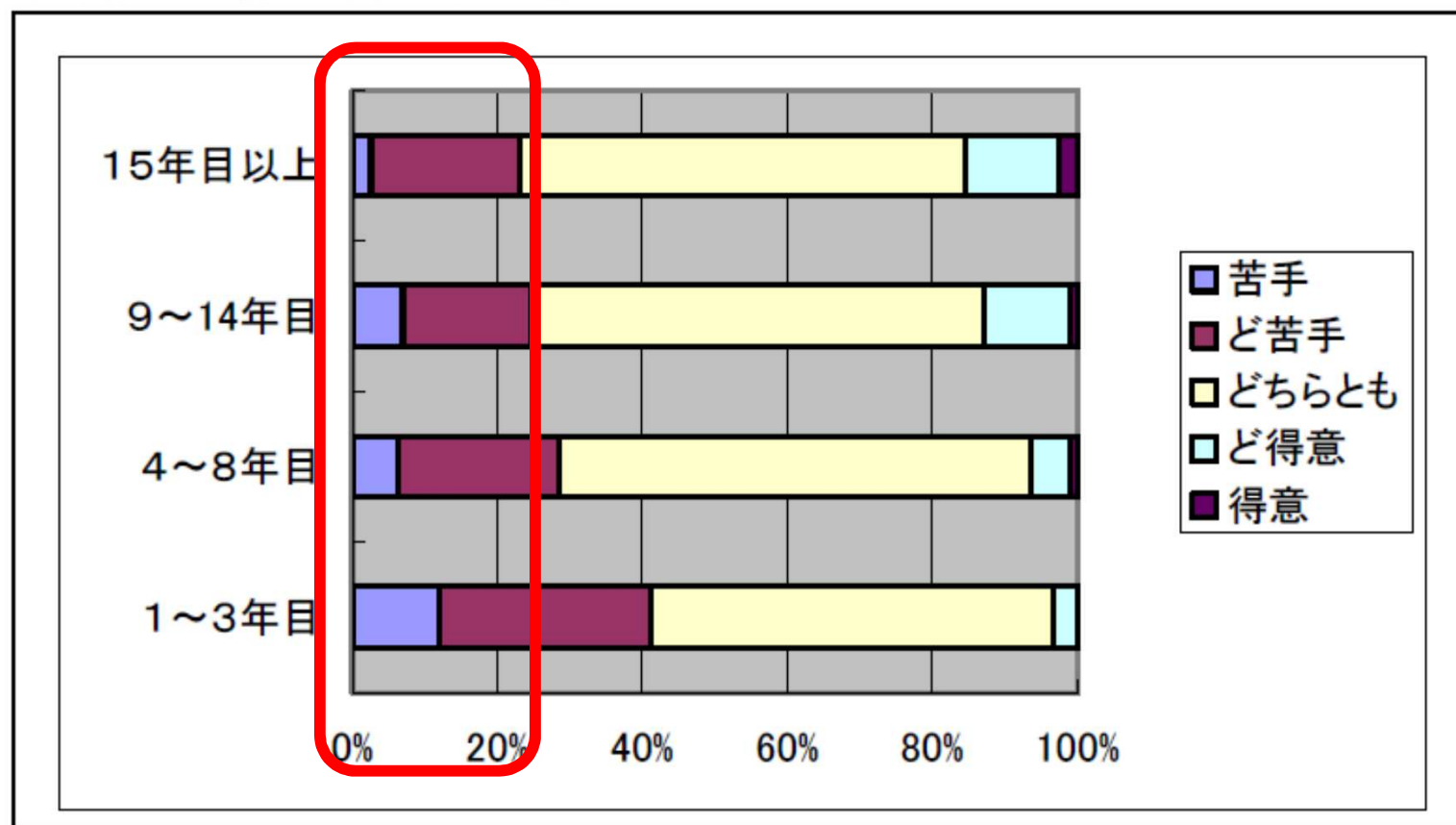


結果

情報が少ない
と思っている人が、
多くの情報
を出せている
とは 限
らない。

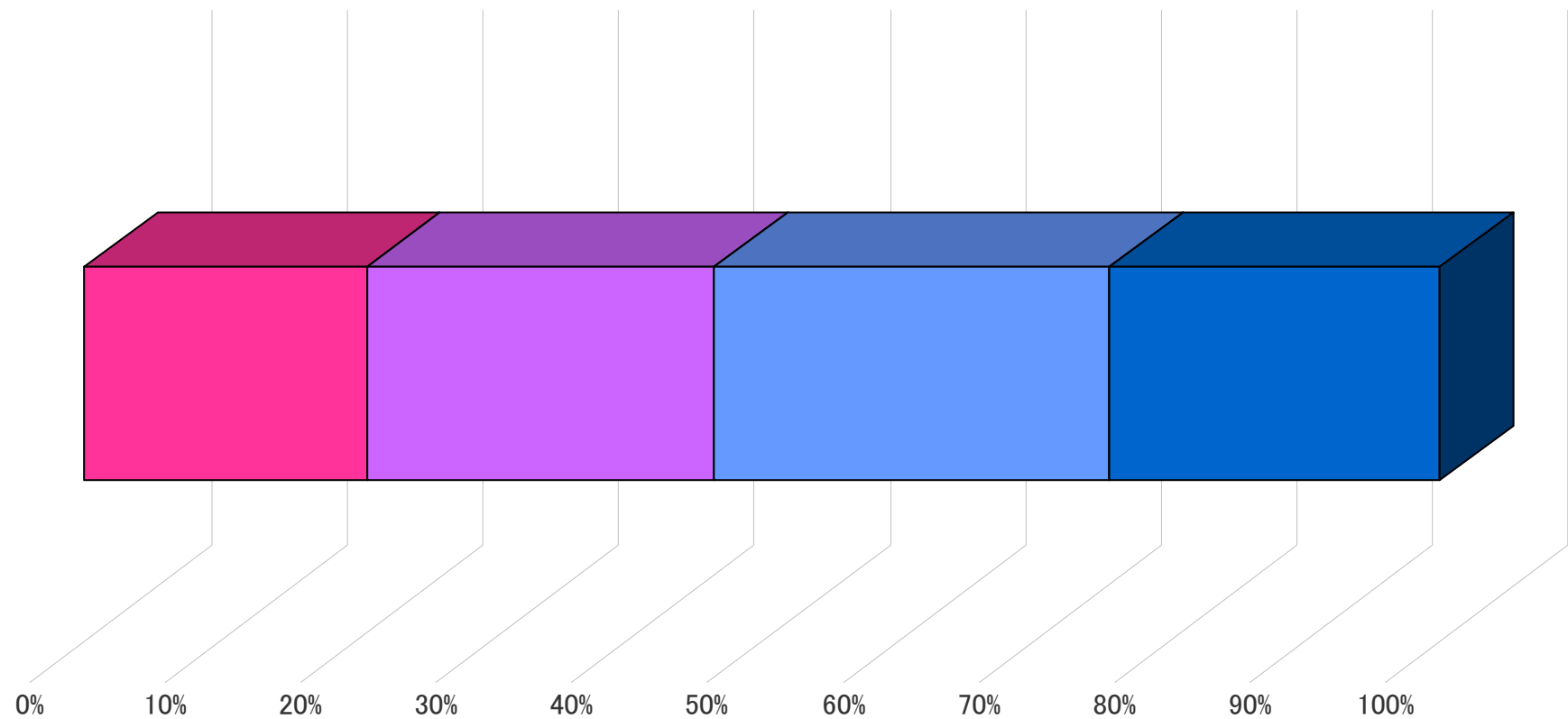
疑問 2 経験年数を重ねれば、連携に対する 苦手意識は減るのか？

経験年数と連携に対する苦手意識



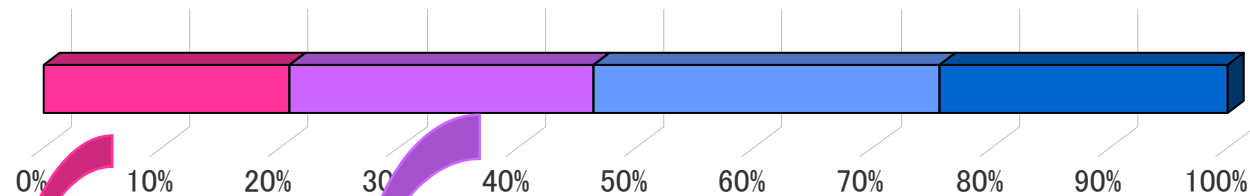
結果 少しずつ「得意」は増えるが、一定割合で
苦手意識を持っている人が多い。

パイロット事業への参画状況



- 研修会・会議に参加 95
- 参加はしていないが取り組みの内容は知っている 117
- 取り組みは知っているが内容までは知らない 133
- 事業のことは知らない 111

パイロット事業への参画結果①

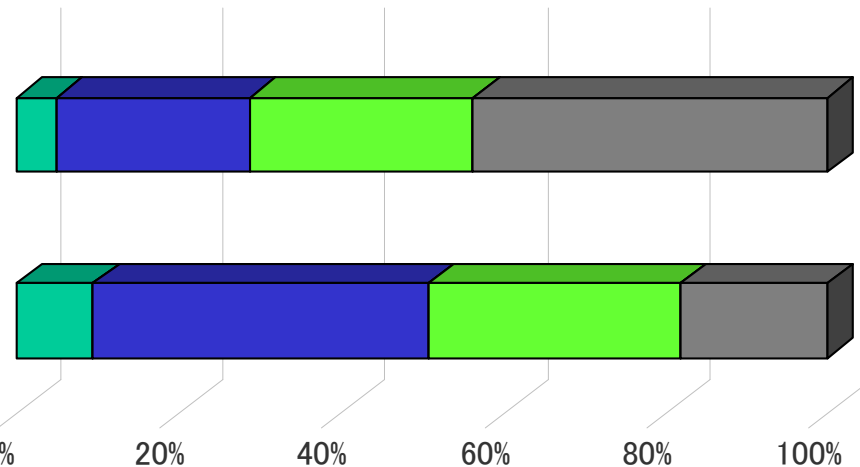


- 研修会・会議に参加 95
- 参加はしていないが取り組みの内容は知っている 117
- 取り組みは知っているが内容までは知らない 122

今年度の変化

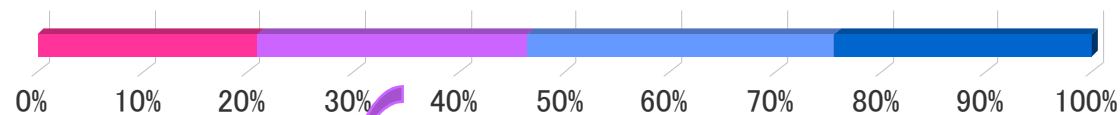
参加はしていないが取り組み内容を
知っている

研修会・会議に参加



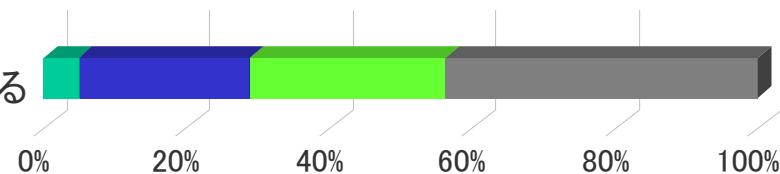
- 自分から情報を集めるようになった(電話や直接会うなど)
- 以前に比べ意識してサマリーを書けるようになった
- 職場で連携に関する話題が増えた
- 特に変化なし

パイロット事業への参画結果②



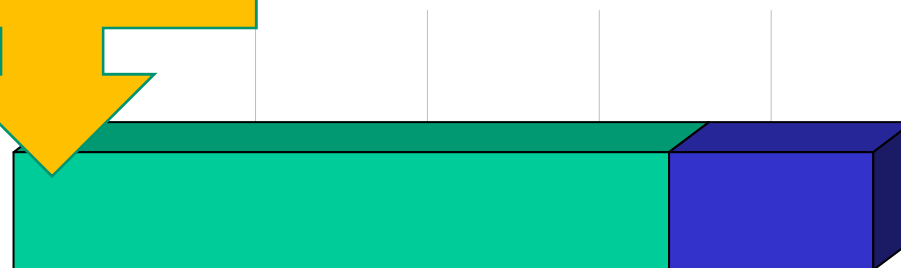
今年度の変化

参加はしていないが取り組み内容を知っている



何らかの行動変容があった会員

- 自分から情報を集めるようになった(電話や直接会うなど)
- 以前に比べ意識してサマリーを書けるようになった
- 職場で連携に関する話題が増えた
- 特に変化なし



何らかの行動変容があった会員の76%が、同じ職場に研修・会議に参加した会員がいる

②連携のための全体研修

●中南部会場：7月19日開催

県士会員62名 非会員1名 計63名参加

●北部会場：8月23日開催

県士会員14名 非会員21名 計35名参加

プログラム

- ①パイロット事業の趣旨説明
- ②アンケート結果の発表
- ③県内主任クラスのOTによるシンポジウム
- ④連携についての講義 「連携とは」
- ⑤連携が効果的に働いた事例発表
- ⑥連携促進ツール
「いちゃりばちょーでえカード」紹介



③エリアリーダー会議・エリア会議開催

エリアリーダー会議 8回開催

県内主任クラスのOTが集まり、連携について現状や教育方法について話し合う会議。1回目より運営会議と兼任。

エリア会議 北部・中部・南部で1回ずつ開催

エリアリーダー中心に、各地区のOTが集まり連携について現状を話し合う。



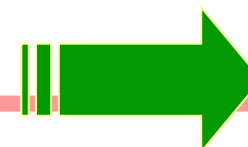
各会議での議題：

なぜ、連携に関する課題は無くならないのか。

連携が上手くなる為には、どうすれば良いのか？



各地区で行われたミーティングやグループワークから
様々な要素が抽出された



連携に内包される課題

1. 専門職の卒後教育として
2. 情報の送り手として
3. 情報の受け手として
4. 管理者として人材育成を行う立場で



※ここに挙げられた課題は十分に検証されたものではありません。
連携の技術を指導する際の言語の共有化が行われたもののご理解
下さい。

1. 専門職の卒後教育としての課題

●連携は

- ・実践を通してのみ研鑽される技術
- ・「OTとしての想い」と「効率が求められる業務」のジレンマ

●連携を意識した学びの場が少ない

モチベーションに個別性



環境が大きく作用する

2. 情報の送り手としての課題

- ① 自分がどんな情報を送りたいのか、
何を伝えたいのかを知っているか

・主観の入った情報を取り扱う覚悟

- ② 紙面の限界を知っているか

- ③ ケースのその後を知る意味を知っているか

どれだけ想えるか
行動を起こせるか



3. 情報の受けてとしての課題

- ① 「前の環境・状況」を知りたいか
- ② 情報の送り手を想像できるか
- ③ ケースの「いま」を、送り手に還す
意味を知っているか



どれだけ想えるか
行動を起こせるか

4. 管理者として人材育成を行う立場の課題

- ① 「連携についての教育の有用さ」を知っているか
- ② 連携を促せる上司・先輩になれるか

環境を創ることができるか



(研修後の感想より)

研修して手技を覚えた時に似ている。
新しい手技は使いたいけど実践しないから身につかない。

日常業務に埋没するジレンマ

**自ら動くには危機感が必要、
困らないと動けないのでは？**

情報を送らなかったから
対象者の不利益に
つながってしまった！

情報の不足を指摘され、
クレームにつながった

あの時もっとこうしていたら！！

③ - 2 いちやりばちょーでえカードの配布

(所属名)

〇〇 病院 の
作業療法士

△△ □□ です。

ご不明な点がございましたら是非ご連絡ください。
お待ちしております。

連絡先：TEL (098) 000-0000

※ 8:30 ~ 9:00 が時間を作りやすいです。



自由記述欄



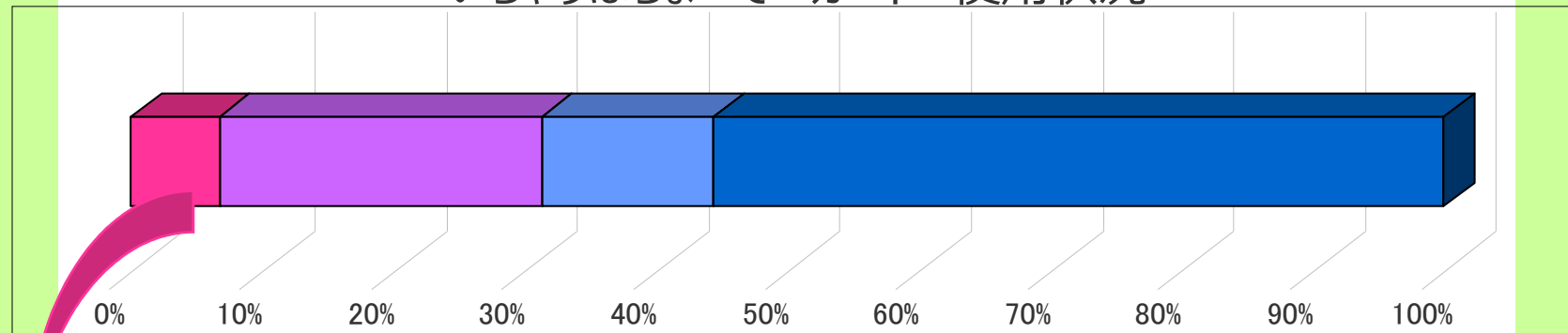
退院してお孫さんの
運動会を見に行かれる
のを楽しみに、
リハビリを頑張ってお
られました。

いちやりばちょーでえ（皆兄弟）カード

**初回1セット（40枚）配布。
追加は県士会HPよりDL**

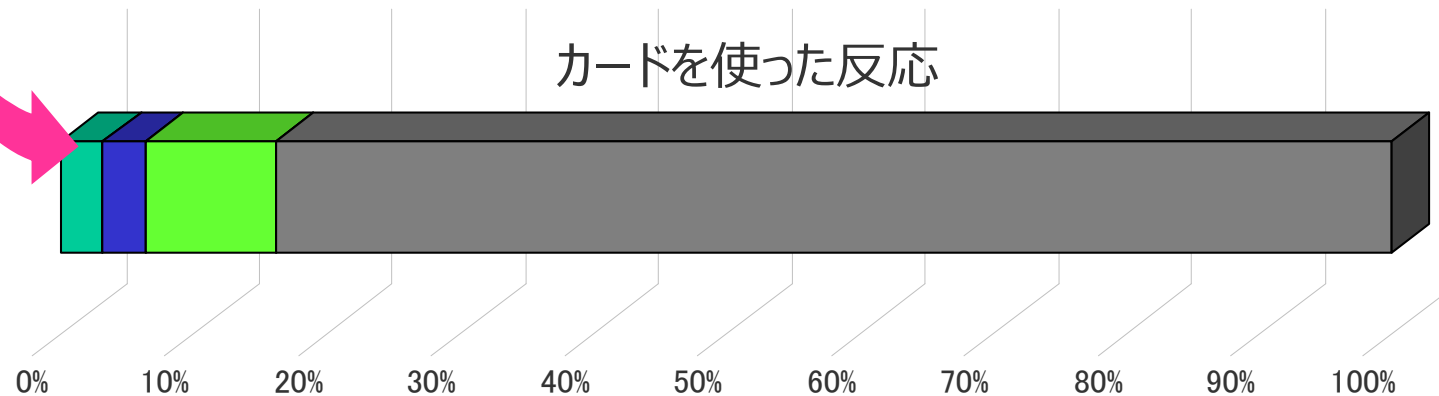
後期アンケートより

いちやりばちよーでカード 使用状況



- 使ったことがある 31
- 実物はみたが使ったことはない 113
- 聞いたことはあるがみたことはない 60
- 知らなかった 256

カードを使った反応



- 電話での問い合わせや報告があった 1
- 直接会って問い合わせや報告があった 1
- 紙面での問い合わせ・報告が来た 3
- 特に反応なし 26

いちやりばちよーでえカードに関するコメント

実際の使用は少数にとどまったが、アンケートでは好意的なコメントが寄せられた。

使用者の感想、経緯を分析し今後の普及・啓発のヒントにしたい。

<実際にカードを受け取った会員から>

- サマリーとは別にいちやりばちよーでえカードにて重点的に介入して欲しい内容を伝えてもらったのでより意識して介入できた。
- いちやりばちよーでえカードに通常の情報提供書に無い+aの情報があつた。また、直筆で連絡しやすい時間も書かれており、他院とのコミュニケーションがとりやすくなった印象。
- 院内の連携委員会で紹介した時に好評だった。病院全体で使用する案を検討中。

〈どうすれば情報の伝達が途切れないか、
という質問に対して〉

カードに対して肯定的な意見

- このカードのように気軽に電話できるような物は良いと思います。
- 今後、サマリー提供時にこのカードを使用したいと思った。
- なかなか離床出来ずこちらでも困っている方がいて退院後、施設の方からもどういう状況だったのか電話がありました。サマリーには記載はしていましたが、もっと情報がほしかったのと聴きたい項目に差があったのかと思うため、これから改善していきたいです。
- カードを使ってみたり、連携について意識し自ら行動をする事。
- つながる事、伝える事をセラピスト一人一人が意識を高めていけたらと思います。そのツールとして「いちゃりばちょーでえカード」はとても良い方法と思います。
- いちゃりばちょーでえカードをたくさん用意しておき、すぐに使用できる状況を準備しておけば使いやすいので準備してみます。

カードに対して肯定的だが普及方法に課題があるとの意見

- 広報誌や定期のFAX通信などでも、もっとこのカードを載せることで浸透するのではないかと思います。
- 全体で共有しなければ意味がない。カードを利用するのであればもっと研修会などで使い易さを含め検討する必要あり。
- カードの用途の普及
- カードを各病院で広める
- このカードがどの施設でも普及すれば、情報伝達がうまくいくと思います。
- 職場にカードを置く場所を作ったら少しは変わったかも。
- 新しいことなので 今までの方法で行なっており、情報提供する際にぱっと思い浮かばなかった
- カードを認識することで伝達は行い易くなると思う
- カードが広まれば伝達していくと思う。できるだけ多くの方が使い、その感想やどうだったかを広報誌等に載せ認知してもらう。

カード以外の方法を模索する意見

<直接的連携>

- カードとかではなく、直接やり取りが出来るカンファレンスとかがあればうまくいくのでしょうか。
- 本当は直接Face to faceで話した方がいろいろ雰囲気も伝わると思います。
- 連携ツールではなくフットワークの軽いスタッフの育成

<ITの活用>

- facebookなどの情報ツールを使用したりする
- メール配信
- ネット社会なのに書式を伝達ツールにするのは時間、手間がかかるので普及しないと思う。またOTだけで動くことも普及しにくい要因になると思う。リハ業界でSNSのように写真、書式が簡単に送受信できるものがあればコピーペーストが楽なので使うと思う

<決まりごとをつくる>

- 県内の情報提供書の書面を統一する
- 各病院の連絡の方法が決まっていれば（電話やFAXなど）連絡がとりやすくなると思います。

事業目的の達成状況

①連携状況の把握	○
②OT同士のネットワーク作り	○
③直接的連携の結果・効果分析	○
④他職種への効果提示：事業結果の冊子作成等	×

結果および成果①

県全域のOTの参加・意識づけ

施設回収率は前期74%、後期55%。県士会非会員の協力も多数あった（前期121通、後期108通）。

ホームページ、広報誌への掲載に加え、アンケート依頼時の一筆箋添付、電話による督促など、運営側からの働きかけにより、離島・僻地を抱える沖縄県でもアンケートを通じ多くのOTが事業に参加できた。

沖縄県においては離島地域から遠く離れた本島中核病院へ入院することがほとんどであるため、士会全域で取り組むことが重要であった。

結果および成果②

エリアごとに活動が行なえる きっかけ作りの成功



北部地区OT勉強会発足

近くに勤務して名前は知っているが、実際に顔を合わせたことが一度もなかった北部地区のOTが、本事業での集まりをきっかけに勉強会を立ち上げ、互いに直接問い合わせできる関係を築いた。

また、僻地には都市部の会員が、まずは足を運んでみる必要性を感じた。「僻地も同じようにOTが、同じように会員が居る」ということを都市部のOTが意識できる。

僻地の会員が、都市部と同じように研修会等の機会を望んでいることを知ることができた。

結果および成果③

事業運営の課題とポイント

- 事業を通じて「相手がアクションを起こせば、自らも反応する」という行動変容の可能性も示された。
発信側のアクションの起こし方が今後の課題。

課題 1) 核となる人員の確保

2) 連携スキルを高める仕掛け

3) 事業運営

課題① 核となる人員の確保

1) 事業を周知し、それぞれの臨床現場、職場での声かけが必要

→ 現場で初めて取り組む時や、常時行えるようになるまでは現場でリーダー的なOTの声掛けや支援が必要と思われる

2) 中心になって動く、または活動に協力してくれるメンバーの確保

→ 拠点病院のOT（大勢のOTを管理しているような）に協力を依頼し運営側から拠点病院に派遣依頼する。

3) 連携に対して意識の高い対象者に焦点を当て事業参加を促す

→ アンケートの返信の速さ＝協力的で連携への意識の高い施設。連携に積極的、または人材育成を考えているOTがいる可能性大。

課題② 連携スキルを高める仕掛け

1) 方法、ツールの検討

→ カード内容は簡単なもの。しかし「初めて使う」ことへの抵抗感があった。「使った時の効果」を経験していない。送り手も受け手においても「使う」ことへの支援が必要。

2) 集まる機会/場の継続

→ 連携についての現状認識を深める座談会/会議。
OTが集まり対象者について話す場、研修会や勉強会の継続。

3) 実際の連携ケースの振り返り

→ 連携を題材にした勉強会で事例を深める。特に他職種から「OTらしい」と言われた事例は重要。

課題③ 事業運営

1) 先を見越したスケジュール管理、予算運営が難しい。
(何に、いつ、どれくらい予算が必要なのか手探りになった)

2) 活動が盛り上がった時期と停滞した時期がある。

→ 年間を通しての事業計画の厳密化、見直しと修正。
今回、各施設の管理職が中心になっており時間的な制約が大きかった。早い時期に2番手（サブリーダー）に意識づけを行い、会議参加や現場での声掛けを行う流れが必要。

3) 組織構成をしっかり作る

→ 事業開始前に意思統一の準備期間が必要。
プレ会議で意識の統一と明確な役割分担が必要だった。
まずは1年、土作り草の根運動として展開する。

今後の展開

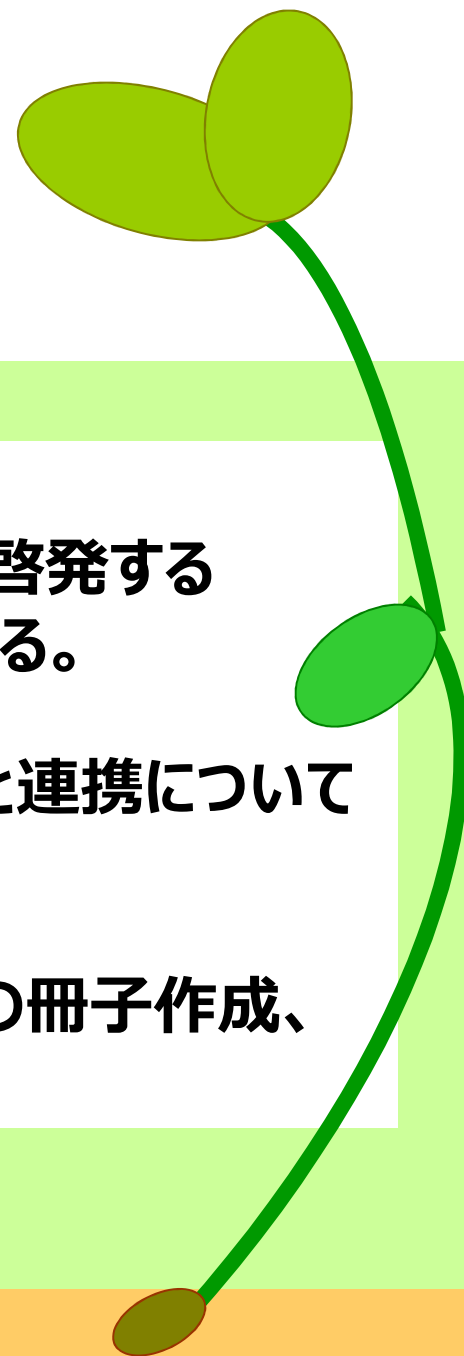
土作り・種まき後の芽を育てるために

1) ワーキングチームの発足

今後、運営は有志の集まりではなく、連携の研修、啓発する
県士会内の部局創設を目指す準備室として活動する。

2) 離島での研修会、生活行為向上マネジメントと連携についての
研修会を実施する予定。

3) アンケートの分析、連携事例を集め啓発の為に冊子作成、
広報活動を行なう。



まとめ

連携スキルは実践でのみ研鑽できる技術である。

臨床でのスキルアップ、作成された共通のツールの使用に

【情意レベルの卒後教育】が重要であった。

「連携について考え、行動する」をテーマに、今後も県内
OTが集まる場・機会を継続したい。

本事業は主に沖縄県本島、身障領域を対象に展開されたが今後はOTが関わるあらゆる分野、また僻地・離島地区にも活動範囲を拡大することが計画されている。



他士会への普及のために

沖縄も未完成ではあるが、以下のポイントは述べられると思います。

- ①多くの会員が、連携意識はあるが実態は不十分である可能性が高いという認識をもつこと（逆に連携が不十分・自信がないために意識が高いとも考えられる）
- ②書面だけのケース引き継ぎには限界がある
- ③O Tらしい部分の内容は、特に既存のサマリーで伝えることは難しい
- ④一度顔を合わせれば、即、連絡がとりやすくなる（相手を知ることの必要性）

⑤まず、その地域の管理職レベルのＯＴで連携の現状や問題点を把握し、連携に対して共通の意識をもつ

⑥（今回できなかったが）次に２番手も一緒に活動すること
→ 管理職だけでは限界がくる

⑦継続する意識（１年間では無理）

⑧その地域のＯＴ同士がつながる場
（研修会、情報交換会など）の工夫

⑨急性期病院のＯＴ室で連携ケースの多い回復期のＯＴを呼んでの情報交換会/回復期病院のＯＴ室で連携ケースの多い地域のＯＴを呼んでの情報交換会など

⑩全土会員で取り組む意識（離島、僻地を含め）が重要